

竜馬外伝

i

43

陸奥宗光の秘密の章



中祭邦乙

— 土佐 —

平井加尾の心はどん底にあった。

「家から罪人を出して山内家からは睨まれ、下士との接触は完全に断たれている。もしも勤王
党員と接触するところを見られたら、今度こそ平井家は断絶させられてしまうでしょう」

・・・でも、兄の無念を晴らさずにはられない！

それを口にするなど出来るはずもなく、強い決意を胸に秘めて過ぎ去る日々を漫然と数えるばかりである。ただ心の中で膨らみ続けているのは竜馬への期待であった。

(・・・頼みの武市さんも藩に囚われてしまいました。竜馬さん、助けてあげて。そしてどうか私たちの無念を晴らして下さい・・・)

しかし竜馬の誘いを断ったという負い目が心に突き刺さっている。

(・・・竜馬さんに誘われたけれどあの時はそれが出来なかった。男の服装を纏い、腰に刀を差して京の町を駆け巡り、共に日本を変革させようと言って誘う竜馬さんの言葉を鵜呑みに出来なかった。・・・裏切ってしまったのは私)

その罪悪感が重くのし掛かっている。

それが天罰となって、兄・収二郎を殺してしまったのではないかと自分を苦しめているのだ。

(・・・竜馬さん、今、どこでどうしていますか・・・。逢いたい、今すぐにでもあなたに逢いたい。そして許してもらえるのならば、今度こそ一緒に世のために駆け回り、兄の果たせなかった無念を晴らしたい・・・)

— 大坂・淀川 —

「収二郎・・・」

加尾の思いが通じたのだろうか、竜馬は土佐で切腹させられた平井収二郎の事を思い出していた。

収二郎や加尾の顔が思い浮かんで消える。そして心の奥底では、ずっと友の行方が気になっているのである。

「この海軍塾に入ればえいののに、・・・内蔵太はまだ生きちゅうろうか」

池内蔵太が長州へと逃げて行った事を竜馬はまだ知らない。天誅組の乱を起こした吉村虎太郎、那須信吾は大和の地でその命を散らしたとは聞いていたが、同じく天誅組に加わった友人・池内蔵太の消息は聞こえてこなかった。

天誅組の乱の首謀者とされる中山忠光の首も見付からず、その姿も消え失せている。ある一部の情報では長州へと流れたとも噂に聞こえている。

・・・内蔵太もそうであって欲しい。

これ以上に友や仲間の死を受け入れたくないし、聞きたくもない。

皆、竜馬と親しかった友なのである。

しかし今、故郷の土佐では武市瑞山を筆頭に、勤王党の面々が獄に繋がれている。一時は藩主に認められて藩論を左右した土佐勤王党も風前の灯火なのだ。無事なのは、海軍塾に集った仲間達だけだった。

（・・・わしの許から離れた奴は皆、命を失っていく。それでも生き抜いて欲しい！ 今は刻々と状況が変化しちゅうぜよ、世の移り変わりが早いんじゃ）

朝廷を抑えていた長州の天下もアツと言う間に終わり、今は徳川慶喜公以下、賢侯が朝議に加わっている。朝廷側も三条実美から中川宮へと実権が移っている。

（・・・何が正しく、何が誤りなのか）

善悪の基準もコロコロ変わる。

ここ数年は何とも目まぐるしい。あまりにも目まぐるしい。

そんな最中に、天誅組の乱から池内蔵太の消息も途絶えたのである。

（そもそも何故、天誅組に加わったのか、それが問題よ）

・・・聞いたところでは、京の学習院に出入りするようになってから内蔵太は何か重大な事実を掴んだと言っていたらしいのだ。

（それが何故、天誅組の乱ながよ？）

竜馬は首を傾げる事しか出来なかった。

・・・事態は複雑化してきている。単なる尊王攘夷や佐幕開国といった事では割り切れない状況が次々に発生しているのだ。

（今はただ己を信じ、勝先生を信じて、完成間近の神戸操練所と海軍構想を推し進める事が最善なのだ）

そう自分に言い聞かせるしかないが、・・・友を思う気持ちだけは誤魔化せない。
刹那、加尾の瞳が竜馬の脳裏をすり抜けて行った。

將軍を京に迎え入れる直前の事である。

坂本竜馬は京へと向かう舟上にあった。陸奥陽之助も一緒である。京へ向かうと伝えるなり、同行したいと懇願したので連れてきたのだ。

竜馬は勝海舟の命を受けて近畿の情勢を窺っているのだが、京に限らず国内各地に楠木正成を奉じる動きが急速に広がっているのが気になっていた。。

「まず佐賀で楠公祭が起こり、薩摩、そして諸藩へと伝播しちゅう。妙な事よ」

「長州藩と七卿が京から長州へと向かう際にも、湊川に立ち寄ったとも聞いています。あそこには楠木正成が奉られていますから」

それほどの影響を与える楠公への思慕が何故、急に起こったのか。

・・・南北朝時代に南朝天皇の義臣として仕えたのが楠木正成である。その生き様に共感しているのだろうか。

「長州藩や志士は南朝革命をも標榜しちゅうようじゃが」

勝海舟からそう聞いていた竜馬だったが、どことなく府に落ちない。

「・・・発信源は京らしいですね。しかし政変とは無関係ですよ」

楠木正成を奉じる動きは政変の前からあったのだ。

「誰かが楠公信奉を意図的に流しちゅうんじゃろうか」

「長州でしょうか」

それを竜馬は知りたかった。

「・・・かもしれん」

「それとももっと別の勢力が関わっていると」

「それを探るんじゃ！」

誰が、何のために、どうやってその思想を拡散させているのだろう。

「京の学習院に集まっていた諸藩の志士が各地に拡げたとも思えますね」

そもそも京の学習院は公家の師弟が歴史を学ぶところだったが、どうやらその実態はまるで異なり、諸藩の藩士も立ち入る事を許されていたのである。つまり志士と公家が接触できる場所となっていたのだ。

そこは幕府が介入せず、長州からは桂小五郎や久坂玄瑞、土佐からは武市瑞山ら土佐勤王党员も出入りしており、他の西南雄藩の藩士も多数出入りしていたようなのだ。

「妙なのは土佐藩よ。土方楠左衛門と田中顕助の二人は藩から学習院に出入りを命じられて、そこで得た情報を藩に報告していたようなんじゃが、どうやらその二人、容堂公からの直接の命を受けて二人は長州藩へと向かったらしいがよ」

「佐幕を標榜する山内容堂公は京で公武合体として朝議に加わるよう推されておられますが、その気も薄いようで。そもそも山内家は三条家とも長州の毛利家とも縁戚関係にありますから」

「そうよ。容堂公は長州藩へと落ちた三条実美と繋がっちゅうがよ。そんで一体、何を画策

しちゅうがやろう・・・」

竜馬の根底には土佐勤王党を封じ込めた容堂への疑念と怒りがある。

(・・・収二郎達を殺し、武市さん達までも殺すつもりなのか?)

不信感が湧き上がってくる。

「・・・何を暗躍しちゅうがぞ！」

「長州には、天誅組事件の首謀者・中山忠光公が流れ、そこに潜んでいるとも聞きます」

「やはり長州の仕業じゃろうか、楠公信奉の発信源は」

「ではなぜ佐賀から始まったのでしょうか」

まるで掴めぬ不穏な噂、そしてその真相と目的。

「まず京から探ってみるしかないぜよ！」

苛立ちを感じたのか、握った拳に力を込める竜馬であった。

文久三年に日本の情勢は大きく変動した。

実質的に日本の中心が京に移り、江戸の徳川幕府は形骸化した。その京を手中に収めていたのは長州ら尊王攘夷派だったが、薩摩・会津が政変を起こして長州藩が退けられ、朝廷は尊王攘夷から公武合体へと大きく転換したのである。

京は公武の協力体制が支配したのである。

大手を振っていた長州藩士が消え、京に残された志士や浪人は京都守護職の会津藩、京都見廻り組、そして新撰組が追い詰めていく。

一方、京には一橋慶喜、松平春嶽らが次々に入京して賢侯が集結していた。そして京に公武合体の参豫会議が成立したのである。

舞台は整った。

文久三年はそんな年だった。

そして翌文久四年早々、公武合体の京に将軍・徳川家茂が再び入京して来た。

今、公武の中心は中川宮と一橋慶喜である。双方の協力体制こそが公武合体なのだが、その慶喜は公武合体の象徴とも言うべき人物で、父は徳川家、母は有栖川宮家。つまり彼は公武の血を引く身なのだ。

しかし慶喜には身の危険があった。幕府の将軍後見職として上洛していたが京の治安は乱れており、悲しいかな、諸藩とは異なり一橋家に仕える兵は僅かである。江戸の幕府も慶喜には非協力的であり、つまり彼の指揮下で動く幕臣がいなかったのである。

そこで慶喜は水戸家出身の兄弟に協力を依頼して水戸藩士を配下に置こうとした。御親兵として朝廷の守りに当たらせるという理由で利用するつもりであったのだ。

だが、そもそも水戸藩士は尊王攘夷の信奉者である。中川宮は不安を抱いた。

「尊王攘夷の武士が京にいるのは危険ではないか」

いつ長州がここ京に攻め入るやもしれないのだ。事実、密かに長州藩士らしき者達が京に潜入し始めているとの報告を受けている。水戸と長州の間には密約があるとも聞いている。

・・・まず今は長州勢から京の公武合体体制を守らねばならない。

その点で慶喜と中川宮は一致しているが、慶喜は水戸藩士を京に駐留させる事を譲らなかつた。。

だが、やはり入京している水戸藩士が問題化した。

慶喜の兄である水戸の徳川慶篤が上京した際にお供として連れて来た藩士達が本圀寺に滞在していたが、彼等を指揮管理してきた松平昭訓（あきくに）が突然死去し、尊王攘夷を主張する水戸藩士が京の町を闊歩するようになったのだ。

彼等は『本圀寺党』を名乗る正規の水戸藩士であり、したがって京都守護職の会津藩も新撰組も安易に手が出せない。

そんな状況を中川宮は憂慮した。

そして慶喜に在京の水戸藩士の管理を徹底するよう強く命じ、慶喜は弟の徳川昭武（あきたけ）を京に呼び寄せてそれを委ねる事にしたのである。若干十五歳の昭武に任せるとは言っても、実質的には慶喜が本圀寺党を配下に置いた事を意味しているのだ。

これにより慶喜の立場が微妙なものになった。

公武合体として将軍後見職にありながら、配下の本圀寺党は強烈な攘夷思想なのだ。また彼は有栖川宮家の血を引く者であり、その有栖川宮家は強烈に攘夷を推進する宮家なのである。長州毛利家と婚姻関係を結んで密接な関係がある宮家でもあり、予てより尊王攘夷派の志士とも通じているのである。

そして事実、その有栖川宮家を頼るべく長州藩士が密かに接触していたのである。

京から追放された長州藩では、京への復権を試みる動きが活発化していた。

真木和泉は率兵上洛を叫んでおり、その機運を高めている。

これを危ぶんでいた桂小五郎は、

「まず正統性を朝廷に訴えるべきだ」

と主張しており、その嘆願のために上洛する機会を窺っていた。

そしてまず長州藩士を京に潜入させて有栖川宮熾仁（たるひと）親王に接触をさせていたのである。

有栖川宮は親長州の大物宮家で、これまでに幾度も尊王攘夷の士の命を救ってきた宮家であった。尊王攘夷派の鳥取藩士数十名が藩主の側近らを惨殺した本圀寺事件においても、藩主・池田慶徳が藩士に切腹を申し付けても有栖川宮がそれを中止させて命を救った。その際に桂小五郎も幕府に捕らえられた鳥取藩士を救い出し、それが元で小五郎にも捕縛の手が迫ったのである。

一旦、京を脱出した小五郎だったが、対馬藩士と偽って再び京に戻り、長州藩の復帰を目指して諸藩を周旋して廻った。

・・・好転の兆しが少しづつ見え始めた。

だが、長州の国許では真木和泉の唱える率兵上洛が避けられない方向へと傾いていたのであった。

小五郎は焦った。

しかし焦って動けば我が身の危険が増し、万一にも捕縛されれば長州藩はますます不利な状況に追い込まれてしまうだろう。

「焦ってはダメだ」

小五郎は諜報活動に力を入れて、幕府側の動きを探る事にした。

間者は新撰組にも潜り込ませてある。浪人集団たる新撰組は間者も潜り込み易かった。

小五郎は放った間者からの情報を頼りとして好機を待ち続けるしかなかった。

間者の元締めは古高俊太郎という男である。彼は長州藩・毛利家の遠縁にあたる筋金入りの尊王攘夷論者であった。

世間の目を欺くため大店・枺屋に養子入りして主人に収まっていた。枺屋は薪炭商として諸藩と広く商いを行い、古道具や馬具なども扱う京の大店である。武家の出入りも頻繁にあり、それを隠れ蓑にして長州への情報活動や武器調達を行っていた。

古高は大店の主人として公家との人脈を広め、毘沙門堂門跡家士という地位を利用して有栖川宮とも親しくなっていた。そこから枺屋は有栖川宮と長州側との重要な接点になったのである。

また長州の放っている間者は皆ここで情報をやり取りし、朝廷への橋渡しや志士達の連絡・宿泊・集会・資金提供から長州に関わる他藩の浪士・浪人の世話もここでしていた。長州へと向かった土佐の中岡慎太郎や、北添佶磨らも一時期ここで世話になっていたのである。

しかし、やがて新撰組が古高俊太郎を監視するようになった。新撰組は捕縛した浪士から情報を吐かせ、長州藩士やそれに類する浪人が京に潜り込む際に柵屋を頼ってくる事を掴んでいたの
である。

・・・追う者と追われる者。

新撰組は狼の如く獲物を追い詰めていく狩人となった。

獲物は志士。

志士という名の人間である。

・・・人間を狩るのもまた人間。

京の都は殺伐とした空気感に支配されていく。

しかし新撰組の中にも長州の間者が潜んでいた。そして当然の如く古高に繋がっていたから、
志士は新撰組の網を巧みに逃れる事が出来たのである。

「妙だ。・・・我が新撰組隊士の中に間者がいるのではないか・・・」

近藤勇はそれに気づき始めていた。

数ヶ月前から新撰組の中で変化が起こっていた。

京の市中見廻り、治安維持を役目とする元浪人組織は会津藩に仕える治安集団として朝廷から『新撰組』の名を賜ったが、その内部は一枚岩ではなかった。芹沢鴨、近藤勇、それぞれの一派があり、倒幕派の間者も紛れ込んでいる。そして日常的に粛清が繰り返されていたのである。

局長の近藤勇は全隊士の素性を洗い直していた。

そして間者と見られる隊士を割り出し、六名のうち三名を断首したが残る三名には逃げられた。だが長州の間者とされた隊士は次々に消えていったのである。

だが、それぞれの隊士の心に不信感が芽生えていた。

そしてそれぞれに信じる派閥に別れていく。・・・局長が二人という歪みに亀裂が生じた！

・・・芹沢と近藤。

最大の内部闘争が激化していった。

— 京・黒谷 —

金戒光明寺は会津藩の本陣である。

その日、京都守護職の松平容保は怒っていた。

「幕府に見切りをつけたと申すのか、芹沢は！」

新撰組の名を与えた飼い犬が裏切り、倒幕派の大物公家と結託しようとしている、という情報を得ていたのだ。

「許せん！」

前身の浪士組の時にも反幕府に利用されそうになった経緯がある。新撰組はそんな集団なのだ。その局長たる芹沢鴨が再び新撰組を反幕府の集団へと変貌させようとしているに違いなかった。芹沢は水戸天狗党の流れを汲む尊王攘夷の人なのである。

新撰組を預かる松平容保はそんな芹沢鴨の動きを怪しんでおり、動きを探っていた。

まず飛び込んできたのは、

『・・・局長の芹沢鴨と副長の新見錦は本圀寺党と呼ばれる水戸藩士達と親しく接している。本圀寺党には芹沢達と同志だった者達が多数いる』

というものだった。

そもそも芹沢鴨は酒に酔うと見境もなく攘夷を叫ぶほどに強烈な尊王思想を持つ尽忠報国の士である。

公武合体の京にあって尊王と敬幕は両立出来るとは言っても、尊王攘夷の水戸藩に繋がる芹沢は厄介な男に思えた。浪人達と命をやり取りする危険な役目を会津藩士でなく新撰組にさせようと預かったものの、そこに尊王攘夷論者の芹沢鴨がいては話が複雑になる。

それだけではない。

『芹沢は長州藩とも接触している』

とも聞こえてきているのだ。松平容保は怒りに震え出した。

「敵を見誤っておるな」

・・・そこに芹沢暗殺の芽が生まれた。

公武合体を維持しようとする松平容保は近藤勇に密命を下したのである。

「芹沢鴨とその一派を始末せよ！」

京の治安のために幕府が集めたならず者集団、剣術だけに頼って生きる浪人集団。

その要であった芹沢も、不要になれば捨てられる存在だった。

「会津藩に仕え、新撰組の立ち位置が明確になった今、芹沢はもう不要な人間なのだ」

近藤勇はそう捉えていた。

そもそも芹沢と近藤は根本的に地位も生き方も思想も異なっている。

芹沢鴨は尊王攘夷の総本山たる水戸徳川家に仕えた身、一方、近藤勇は武州の半農の浪人を集めて道場を開いていたに過ぎない。だから近藤は芹沢のような一流家臣に憧れていた。

そして芹沢は尊王、近藤は敬幕である。

芹沢は尊王の人として、京を愛し、京を守る意識が強かったが、浪人集団としてやって来た彼に対して京の民衆の目は冷たかった。やがて政変が起こり、尊王攘夷の長州や公卿が追放されて朝廷が公武合体に移ると、水戸藩の本圀寺党から尊王攘夷過激派が姿を消して、尊王攘夷を公言していた芹沢達の立場も厳しくなった。新撰組の内部でも水戸出身の新見錦が切腹させられるなど、芹沢鴨は孤立感を強めた。

その一方で、近藤一派が次第に新撰組を掌握してその勢力図を変えて行くと、芹沢の素行は荒れた。酒と女に溺れ、界限で乱暴を繰り返す。

人々はそんな新撰組をますます白眼で見えるようになったのである。

いよいよ近藤も決断した。

「芹沢鴨を粛清すべきだ！」

・・・そんなところに松平容保から密命が下ったのである。

文久三年九月十八日、近藤一派は芹沢一派の粛清を実行した。

翌日、新選組の屯所となっている八木邸で局長の芹沢鴨が殺害されていたと会津藩に届け出があった。

「泥酔し、寝ていたところを数人に襲われたらしく、愛人と隊士の平山五郎も首を刎ねられていた。芹沢という男は短気で酒乱、そして乱暴者で、豪商への多額の借金踏み倒しや諸藩への脅迫、遊郭での乱暴など起こした事件は数知れず、揉め事を起こすのは日常茶飯事であり、人から恨まれるのも当然であった。北辰一刀流と神道無念流に通じる確かな腕前も持ち合わせていただけに、寝込みを襲うしか方法はなかったのでしょう」

というのが近藤勇の説明である。そして、

「長州藩の仕業である」

と決め付けていた。

会津藩はそう記録した。

いや、事件の真相はこうである。

予兆は前日から始まっていたのだ。

夕刻から角屋という座敷に新撰組の幹部連中が集まり、『新撰組』という正式な隊名を賜った祝いの宴を開いていた。芸妓も交えた盛大なもので、夜も深まって宴を終えると泥酔した芹沢鴨は籠で壬生の屯所に戻った。芹沢は妾を侍らせ、女を連れて来ていた配下の平山五郎と平間重助と共に再び酒を交わし始め、夜も深まるとそれぞれに床に入り寝静まった。

それを土方歳三が見届けていた。

そして沖田総司、藤堂平助、山南敬介、原田左之助らと共に踏み込んだのだ！

平山五郎と芹沢鴨を刺し殺した！

ただ平間重助だけは一足早く女と共に逃げ出していたが、・・・こうして芹沢鴨とその一派が新撰組から消えた。

遂に近藤一派が新撰組を掌握し、近藤勇を唯一の局長として結束したのである。

— 京・宿所 —

「新選組の初代局長・芹沢鴨が殺された」

それを耳にした時から坂本竜馬は不穏さを感じていた。

これまでも繰り返されてきた粛清と内部抗争であり、新撰組内部では問題児の芹沢よりも近藤の方に人望があったのだから当然だろうと誰もが思っていたが、

・・・竜馬だけは別の見方をしていた。

「・・・そもそもは奴等は壬生の浪人集団ぜよ。それが『誠』という文字を掲げて正義の集団のようになっただけじゃ。攘夷浪人は倒幕と国家転覆を企てる悪人だと決め付けて血の海に沈め、その命を奪う殺戮集団よ。それが幕府に仕えるようになった途端に御役目だと胸を張りゆうだけよ。しかし、そんな浪人上がりも恰も正義の幕臣のように振る舞おうとも、持って生まれた浪人としての本質、その素性や性質は隠せんちや。そもそも武士として背負うものも無ければ、腹を切るだけの気概も無い。ただ成り上がるという欲望のままに生きているだけよ。そのためになら邪魔者は消す、それが奴等の習性ながやき」

それが当然の生き方だと思っている。

・・・奴等が何を求めているのか、竜馬の嗅覚ならそれが直ぐに分かる。

匂いがするのだ。浪人達には同じ匂いがする。

新撰組は権力に惹かれて京に残った浪人集団なのだ。幕府に抗うよりもその傘下に収まる事を選んだ者達なのだ。

何のためか、・・・『誠』のため。・・・己の心の奥底にある誠を貫くために。

竜馬にはそれが分かる。権力に逆らい、貧困の中で喘いできた者達が権力を欲している事を。

そんな匂いがするのだ。

「しかし芹沢鴨は違う。奴は別の顔を持ちゅう。権力欲の裏に隠された大きな目的があったんじゃ。・・・けどその芹沢が殺された。この殺害事件はただの内部抗争やないぜよ」

と竜馬の嗅覚がそれを嗅ぎ分けている。そして、

「・・・長州の仕業には思えん。京を追われた腹いせに新撰組を叩いたところで長州側に得るものはないきに。だから芹沢暗殺事件の犯人は長州藩やない。誰が犯人かは知らんが、きっと別の者よ、別の理由があるぜよ」

そう推測したのである。

「犯人は・・・芹沢が死んで得をする者。或いは死んで貰う必要がある者。・・・新撰組お預かりの会津藩か？」

会津が殺害を命じた可能性がある、竜馬はそう睨んでいた。

文久四年（1964年）新年、京に将軍を迎えてからも、坂本竜馬は新撰組の芹沢局長暗殺事件に疑念を抱いたままだった。

そして京で情報を収集していた竜馬は、芹沢暗殺に関するある事実を掴んだ。

それは予測とは大きく異なるものであった。

竜馬の掴んだ事実、それは・・・暗殺の数日前、芹沢鴨は有栖川宮（ありすがわのみや）邸を訪ねていたという事実である。

配下の者数十人を率いて現れ、

「有栖川宮熾仁親王に仕えたい」

と申し出たらしい。

更に奇妙な事がある。事件後、会津藩から有栖川宮家に千両の金が流れたらしいのだ。

「それだ！」

竜馬は細い眼を見開いて声を張り上げた。

「それが芹沢暗殺の引き金になった証拠よ！」

そう確信したのだ。

そして考えた。

- ・・・殺される直前に芹沢が仲間の十五名と共に有栖川宮家を訪れたのは本意は何か。
- ・・・有栖川宮熾仁（たるひと）親王に仕えたいと申し出た理由は何なのか。
- ・・・暗殺事件後、会津藩から有栖川宮家に千両が献金されていた理由は何か、お詫びのためなのか。

竜馬はジッと腕組みして天を仰いだ。

有栖川宮熾仁（たるひと）親王。

・・・この人物は攘夷派公家の急先鋒である。三条実美が長州へと追われた今、朝廷内で最も強い攘夷論者なのだ。

そもそも有栖川宮家は世襲親王家の一つであり、異国との通商条約に強く反対してきた尊王攘夷派の中心的な宮家である。熾仁親王は三条実美と同じ親長州、反幕府の人物なのであった。

熾仁親王が反幕府に走る理由は有栖川宮家が代々攘夷を強く主張してきた事に加え、別のものが公武合体策の中にあっただとも言える。それは熾仁親王が幼少期から孝明天皇の妹・和宮と婚約を約束していた許嫁の仲だったからである。公武合体策の一環として和宮は将軍・徳川家茂と結婚する事になり、二人の婚約は無理矢理に破棄されたという悲劇。その怒りがそうさせるのか、熾仁親王は反幕府を高々と掲げて京の志士や浪人達を擁護した。そして志士達も親王の名を口にして尊王攘夷に邁進したのである。

そう、有栖川宮熾仁親王こそが京の尊王攘夷の中心人物だったのである。

竜馬は考えを巡らせた。

「水戸藩も反幕府、尊王攘夷を主張する立場にあるきに、水戸の内情に詳しい芹沢は有栖川宮熾仁親王の存在をよく理解していたのは当然よ。

芹沢は徳川幕府の終焉を感じ取っていて、先を見据えて公家との関係を重要視し、有栖川宮に最接近を試みたんじゃないだろう。

・・・幕府の次は公家の時代なんじゃと。

そう読んだに違いないちや。

そして熾仁親王は次の時代の指導的な立場になると睨んだがやろう、だから家来になろうとしたがや！」

しかし、

「それは明らかな幕府への裏切りよ。それを知った会津も、中川宮も、そして新撰組の近藤一派も芹沢鴨を警戒したがよ」

当然である。新撰組は幕府組織の一端であり、会津藩の指揮下にあるのだから。

八月十八日の政変後、長州藩は密かに公家との関係を強めている。久坂玄瑞は有栖川宮家との接触を重ね、親王自らが幕府に攘夷決行を問い質すべく江戸に出向くことも視野に入れて計画を練っていた。

「・・・芹沢はその計画を知っていたのではないだろうか。・・・そしてそれに同調呼応しようとしていたのではないだろうか」

しかし新選組の任務は京都守護職の配下で京の治安維持である。つまり芹沢は任務に背いて攘夷行動に走ろうとしていた事になる。

「それを会津藩が嫌い、阻止するため近藤一派に手を下させたのではないだろうか。つまり・・・あの暗殺事件は、芹沢の乱暴に手を焼いたなどという新撰組の内紛の結果ではない！ 芹沢暗殺を最終的に命じたのは有栖川宮よ！」

竜馬はそう読んでいた。

— 黒谷・金戒光明寺 —

幕府から京都守護職を拝命した会津藩主・松平容保は、京の治安維持のために会津藩士を大挙動員し金戒光明寺をその屯所としている。

近藤勇はそこに呼び出された。

田舎道場で生き長らえてきた浪人同様の男が、幕府の要職・京都守護職との対面を許されたのである。

松平容保が直々に言葉を掛けた。

「新選組という名は、剣に優れた者を集めた先鋭隊の名である。嘗て会津藩に存在したものだ。剣客集団を目指す者達に願ったりの隊名であろう」

「はっ、隊士一同、心より感謝致しております」

平伏したままでそう応えた。

「芹沢鴨という男は長州の手によって殺されたらしいな」

「はっ」

その会話が暗殺を命じた当人と実行犯の確認であった。

「新選組の任務は市中見回りである。局長として組織を統率し、攘夷浪人を京から排除して欲しい。日本国の乱れを正す重要な任務なのだ。・・・これからも新選組には期待しておるぞ」
そんな御言葉を京都守護職から直々に戴いた。

「有り難き幸せに御座います」

近藤は京都守護職の顔を拝む事も程々に、ジッと頭を下げ続ける。

けれどこの窮屈さと同時に、

(・・・本当に幕府お抱えの武士に成れたのだ)

という喜びを実感していた。こんな主従関係の中に探し求めていたものを見つけた思いである。

正に人生最上の時であった。

近藤勇はその感激を壬生の屯所に持って帰った。

そして隊士達に京都守護職から頂戴した御言葉を伝えた。

満足げな顔をしている土方歳三ら隊士達。

だが、そんな隊士の様子を目にしていると、心の奥底で何かが疼いている事に気付いた。

(芹沢鴨を粛清して漸く新選組を一手に握ったが、本当にこれでよかったのだろうか。もっと心地よいものだと思っていたが)

・・・疼き。

(これまでに多くの人々の命を奪ってきた・・・。人の生き血を浴びながら手に入れた今の地位である。これが本当に望んでいたものなのだろうか・・・)

躊躇いも迷いもないが、心の何処かで何かが疼いている。

（そもそも京に上って来たのは將軍様の護衛をするためだったはず。攘夷の先駆けとなるためのはずだった……。一体、何処で変わってしまったのだろう……）

武家政権である鎌倉幕府を倒して天皇による親政のために命を懸けたのが南朝の忠臣・楠木正成である。鎌倉幕府打倒の兵を挙げた後醍醐天皇にいち早く呼応し、最後まで奉じた忠臣として、水戸学は正成を祭り上げていた。

水戸学は尊王の教典であり、志士にとって絶対的な教えなのである。

天皇に仕える者の有り様として志士は楠木正成を理想とした。加えて会沢正志斎や真木保臣が楠木正成を祭祀することを主張しており、それが伝播して各地で正成を崇拜するようになったのである。

楠木正成崇拜により、南朝正統論が広がっていった。水戸学が南朝を正統と結論していたからである。

対して、現在の孝明天皇は北朝の系統であるだけに不気味な動きなのだ。

それを推し進めていたのは志士達である。

志士にその思想教育を施していたのは京の学習院である。

竜馬はそう睨んでいる。

・・・学習院。

そこでは上下公家から諸藩の上下藩士までもが同席して思想教育が行われていた。

歴史を振り返るだけではなく、南朝正統論に起因する倒幕論にまで及んでいたのである。そもそも幕府は、公家と諸藩が直接的に交流する事を禁じていたのだが、京の学習院だけはそれが許されていた。事実、朝廷は草莽浪士の学習院出入りを許し、この時期の幕府はそれを止める力を失っていたのである。

そして学習院で志士と直接的に交流して、南朝教育を推し進めたのである。

倒幕のために。

それを背後から操っていた人物は誰なのか。

・・・中川宮であろう。

竜馬はそこまで読んでいた。

天皇家のために散った楠木正成。

その生きざまが志士達の心を揺さぶり、尊王攘夷活動が更に過激化したように思える。

・・・水戸や長州は無論の事、土佐、薩摩、越前などの志士達の間でも、まるで火に油を加えたかのように激しく尊王倒幕の炎が立ち上った。独裁的に権力を集中させている徳川幕府に反旗を翻して、京や江戸、そして諸国で命を散らしていったではないか。

吉村虎太郎も那須信吾もそうである。加尾の兄であり、竜馬の幼馴染みだった平井収二郎もそのために死んだのだ。

それを思い出す度に奥歯が痛くなる。

「許せんちや、容堂が！ そしてそもそもの原因がよ！」

日本歴史の根底に流れる厳しさ、いや、人間そのものが持つ残虐さが許せない。

「・・・だから知りたいがよ、この悲しみの本当の原因が何なのか、人は悪しきものなのか」常に竜馬はそれを追い求めている。

「まず佐賀藩よ。そこで何があったんじゃろう」

そこからである。

最初の楠公祭は佐賀で嘉永三年に開催されているのだ。ペリーが浦賀に現れるよりも数年前の事なのである。

「匂うちゅう」

・・・なぜ佐賀が最初なのか。

「真っ先に楠公祭を行った佐賀にきっと何か秘密があるぜよ！」

竜馬はそう呟いた。

京は公武合体でまとめ、その反面、西南雄藩では尊王倒幕思想が一層強くなっている。いや、強くさせられているとも思える。

「それが何故か」

竜馬は佐賀にその答えがあるような気がしてならない。

出島を中心に西洋文化の匂いが溢れる長崎。

その長崎に隣接し、長崎の警護役になっている佐賀。

それらの怪しげな空気感に惹かれていく竜馬であった。

— 京 —

「坂本さん、少し私に付き合ってくださいませんか」

「ほっ？」

竜馬は妙な顔をして陸奥陽之助を見た。

日々、忙しい竜馬である事は理解している。神戸、大坂そして京を駆け回る日々。この日は京に入って情勢を探っていた。

だがどうしても伝えたい事が陸奥にはあるらしい。

「何処へ行くがよ」

「・・・栗田口です」

「栗田口？ あそこには」

「そう、中川宮様が還俗する以前からところ、栗田御所があります」

じっと陸奥の顔を見る。

「そこに行くんじゃな」

「そうです」

陸奥の眼には陰しさと自信があった。

「よっしゃ、何が出てくるんじやろう」

竜馬は子供のように目を輝かせている。陸奥は竜馬のそんな性格が好きで堪らなかった。

（・・・事の重大性を予期しているであろうに・・・、この何事にも動じぬ鷹揚さが何とも心救われる。日夜、心安らぐ事のない私にとって、こういう人物が魅力的に見える）

滅多に笑顔を見せる事のない陸奥陽之助が思わず頬を緩めていた。

かつて中川宮は青蓮院宮と呼ばれていた。

青蓮院とは、京都東山の栗田口にある天台宗の寺院であって天台宗の三門跡寺院とされ、これまでに多くの皇族出身の親王が住職を務めてきた格式の高い寺院なのである。『栗田御所』とも呼ばれていた。

— 栗田口 —

竜馬が宿にしていた四条近辺から然程遠くはないが、青蓮院の境内に足を踏み入れるのは初めてである。

「ここは幕府とて勝手は出来ないところです」

ここが特殊な場所である事は竜馬も重々承知していた。

「中川宮は今でもここに？」

「はい、居られます。けれど還俗されていますから、来年には別のところへ移られるでしょう」

「・・・居るんじゃな、魔王と呼ばれる宮様が」

敷地はかなり広い。本殿も大変立派なものである事は言わずと知れたものだろう。

さすがの竜馬も緊張の色を見せる。

陸奥はその本殿には向かわず、その裏側に回り、ずっと離れた所に設けられている御用人長屋らしき建物に向かい、その前で足を止めた。

「こちらです」

「ここか？」

「ええ、でもこちらには宮様は居られません」

どうやらここに来た目的は中川宮ではないようだ。

中に入り、座敷に通された。

暫く待っていると、見知らぬ人物が現れた。

そして竜馬の正面に正座した。

その人物の身形は仏門のそれではなく、武士と同様に鬘を結っており、目に力がある。迷いの瞳。

「私の義兄、伊達宗興（むねおき）です」

と陸奥が紹介した。

竜馬は目を見開いた。

「兄上かよ」

顔立ちは面長の陸奥には似ていない。などと思いながら竜馬は己を名乗った。

「よく承知しております」

「・・・ほう」

「遂にお会いする時が来たという事です」

竜馬が目線を宗興の瞳に向けたまま、沈黙という時間が流れた。

やがてそれを恐れぬようにして、宗興が口を開いた。

「坂本竜馬殿にはお伝えしなければならない事柄があります。弟の陽之助を貴方に近付けておいたのも、こうして御足労頂いたのもそのためなのです」

竜馬は固唾をのんだ。

「わしに・・・かよ」

「そう貴方には伝えておかなければならない事がある」

宗興は竜馬の瞳の奥を見通すような目をしている。

竜馬もその空気感に反応し、両者の視線が交錯した。

そして宗興が語り始める。

「・・・父・宗広（むねひろ）は紀州藩士として勘定奉行や寺社奉行を兼務するなど藩の財政再建にもあたった重臣でした。そして、それと同時に本居宣長に通じる著名な国学者でもあったため、その思想が危険視されて十年以上も幽閉されてしまいました。だが、そこから救って下さったのが土佐の山内容堂公でした」

「容堂公じゃと」

「はい、容堂公の口添えによって幽閉が解かれたのです。その後、父は息子である私と共に脱藩する事を選択しました。・・・京に入ったのは去年の事でした。そして時代の変化を現実のものとして捉えている方々に、父がまとめ上げた歴史学を私がお伝えするようになったのです」

何よりも竜馬が驚いたのは、

「・・・容堂公が・・・関わっちゅうのかよ・・・」

その事である。

「はい、容堂公は我らの立場と使命をよく御存じのようでした」

「何故よ、なぜ容堂公が・・・」

竜馬が詰め寄る。

「あの御方は徳川幕府にとって重要な賢侯であるだけでなく、三条家にも繋がっている。そして我等の立場も理解して下さっている人物なのです」

「紀州の伊達家にもか？」

「はい、・・・我等の特別な使命についても」

「だから今は栗田口かよ、つまり青蓮院宮こと中川宮に仕えている」

宗興が頷いた。

「ええ、・・・そうです」

「中川宮か」

竜馬は細い目をやや見開いた。

そしてこう口にした。

「幾つか確認しておきたい事があるぜよ」

宗興は一呼吸おいて、

「どうぞ申して下さい」

と言い、竜馬はこう尋ねた。

「まず陸奥の事よ。こいつも脱藩の身となって陸奥陽之助やら宗光やらを名乗るようになったのは分かる。では何故わしに付かせちゅうがよ？」

予め覚悟していたのだろう、その問いに宗興は迷わず答えた。

「坂本殿も土佐を脱藩した立場。しかしその思想は、尊王攘夷だけでなく開国論をも受け入れようというお考えかとお見受けしております。・・・その柔軟さがないと父が考察した次の時代を理解する事が出来ない。受け入れる事も作り上げる事も出来ず、新時代への扉を開けようとすら思わないでしょう。・・・しかし貴方には可能性がある、だから弟を貴方の傍に置いて、共に新時代への歩みを進めて欲しいと考えているのです」

「新時代かよ・・・。だからこうして兄上の貴方に引き合わせてその考察に触れさせ、わしの目を開かせようとしちゅうがやな、・・・この細い目を」

宗興は思わず笑った。

その様を見て竜馬もハハハハハハと笑い返す。

場が和んだ。

「そういう事です、坂本殿」

空気が変わった。

常に緊迫する空気感の中で生きてきたこの紀州伊達家である。宗興も宗光も心の底から笑った事などなかったが、それを竜馬は瞬時に変えたのだ。常に冷えきっている宗興の心に人の温もりを伝播させたのである。

すると今度は、真面目な顔をした竜馬がそこにいた。グッと乗り出し、

「もう一つ。・・・わしだけやないんじゃないだろう、こうしてここに呼んだ相手は」と睨む。

「お察しの通りです。先ほど説明したように、新しい世の中を創るのに必要な人材がには正しい教育が必要なのです。無論、見極めが難しいのですが」

「どうやって見極めるがよ」

と竜馬は問い詰める。

宗興は厳しい瞳をしてこう言い切った。

「決まっている事なのです」

「決まっちゅうじゃと」

眉を顰める。

「そう、血脈で決められている」

竜馬は厳しい目を向けた。

「どういう事よ」

「家系で決まっているという事です」

この時代まで家業は代々引き継ぐものであったのだ。

「ならば、坂本家もそうだと？」

「はい、坂本家の血筋は明智家に繋がっております」

頷く竜馬。

「・・・確かに・・・」

「その明智家は我等と同様に、禁裏のため選ばれし家柄なのです」

竜馬は息を飲んだ。

「だからか・・・」

「明智家が信長公を倒したのもそう」

「禁裏からの命じゃな」

「そういう事です」

兄・権平が、この伊達家と出逢うよう竜馬に伝えてきた理由が飲み込めた。

「準備しちよったのか」

「兄上はそこまでご存知ではないでしょうがね」

竜馬は思わず天を仰ぐ。

・・・山内容堂はそれらを知っているのだ。少なくとも紀州伊達家が禁裏と繋がっている事を

。

「貴方の血脈には使命があるのです」

ズシンと堪える言葉だった。

「ならば聞きたい。日本国の次の時代がどうなるのか、わしはそれを知る権利があるんじゃないろう！」

そう口にする竜馬の瞳には宇宙空間のように一点の曇りもない。不安も迷いも全て昇華して、真っ直ぐに『大勢三転考』を受け入れようとしているのだ。

宗興は竜馬の瞳に想像以上の力量を覚えていた。

・・・この吸い込まれるような無限さ、これもまたこの男の才能なのか。

そして、

「無論です。知らなければならない。・・・そして知ったならば行動しなければならないのです！」

と伝えたのである。

・・・禁裏は祈禱を通じて天に繋がっている。

つまり坂本竜馬は天に選ばれた人間なのだ。そして受け入れた後に己の中にどう取り込み、どう発現させるのか。

それを宗興は見たくなった。

・・・だから父・宗広は弟の陽之助こと宗光をこの坂本竜馬に付けると決めたのだ。

そう理解した宗興は『大勢三転考』を竜馬に伝え始めた。

「今から十五年前に、父・伊達宗広は『大勢三転考』をまとめ上げました。大勢三転考とは日本歴史の変化を評したもののなのです。ところが父は表向き上、紀州藩の政争によって幽閉されてしまった事にして、これまでその公表を控えられてきました。

「ふむ、・・・大勢三転考か」

「世の移り変わりを捉えた考え方です」

「ふむ・・・」

「では父・伊達宗広は世の変化をどのように捉えたのかをご説明しましょう。

・・・我が日本国はこれまで幾度も外来の思想や宗教に脅かされ続けてきました。しかしながら、それらを取り込み、代々の天皇を中心とする神道が護られ続けてきたのです。とは言っても時の勢いに押されて過去三度の大きな変化がありました」

「それが大勢の三転かよ」

「そうです。

・・・最初の時代は『骨（かばね）の時代』、氏族の世です。血族が世襲的に土地を私有して収穫物を手に入れた時代でした。

・・・二つ目の時代は『職（つかさ）の時代』、公家の世です。土地の私有を禁じてすべてを公田とし、律令や官僚権力の次代でした。

・・・そして三つ目の今は『名（みょう）の時代』、武士の世です。武家が武力で土地を支配する幕藩の時代です。

しかし今、その体制が揺らいでいます。武士を主体とした幕藩体制が限界を迎え、新たな時代に向けて転換しようとしているのです」

息を殺していた竜馬は大きく呼吸した。

「確かに限界よ、今は」

「ですから時勢の変化を感じ、洞察して、対処すべき良策を立てる事が権力者の重要な使命なのですが、異国の外圧に対して徳川家はそれが出来ず、国家の危機を退ける事が出来ない。つまり武家の世は終焉の時を迎えているのです」

「それが四転目かよ」

「そうです。四転して次の時代となるのです。時は決して留まってはおりません」

「禁裏、いや天の意志か」

「はい」

宗興は目力を強めて頷いた。

「どんな時代よ」

竜馬の問いに対してこう表現した。

「それは・・・公（おおやけ）の時代と成りましょう。天皇を中心に公家と幕府と武士が話し合いで進める世の中です」

竜馬は目を見開いた。

「天皇の下に平等な世の中か？」

「身分という垣根を越えて衆議する公議政治となりましょう」

「議会制か？ 確かに西洋では既に議会という合議制を用いていると聞いちゃうぞ！」

竜馬は思い出していた。

大久保忠寛（ただひろ）や勝海舟が議会という衆議の決定によって、日本の政治を動かすのだと言っていたのを。

「つまり徳川幕府の天下は終わる」

宗興はそう明言した。

「それが天の意志」

「これまでの幕藩体制も、徳川家の絶対的な地位もなくなります」

「・・・なるほど危険な思想じゃな。だから伊達家は幽閉されたのか」

「そういう事です。徳川御三家の紀州藩からすれば表に出せないのも当然でしょう」

竜馬の思考回路がある結論へと導くが、釈然としないところも多々ある。

「徳川幕府の終焉、・・・幕藩体制の終焉か・・・」

「大きな意識の中で動かされているのです」

「それは？」

「日本国体を護るという使命です」

過去、その言葉を竜馬はある人物からぶつけられた記憶が蘇ってきた。

・・・吉田虎次郎こと、吉田松陰から。

竜馬は宗興の顔をジッと見た。

そしてこう口にした。

「この『大勢三転考』は禁裏に献上されたんじゃないろう」

「ええ」

「ではその相手は・・・」

「お察しの通りでしょう」

「宮様の中川宮」

宗興は一呼吸おいてから頷いた。

「はい、深く関わっておられる御一人であるのは事実です」

宗興の眼力が一層強くなっている。

竜馬は陸奥の顔を見た。

「やはりのう。じゃが、まだ奥があるのかよ」

陸奥が頷き、こう言った。

「表面上に過ぎません。しかし紀州藩の藩論も尊王から公武合体に傾き、禁裏に通じる我等も、禁裏自体の存在も煙たがれるようになりました。そんな状況から我等が脱藩して現在に至っています」

「・・・なるほどおまんらの素性は分かった。けんど、わしを買い被りし過ぎぢょうらんか？ わしはそもそもが脱藩した浪人よ、それも二度も脱藩しちゅう。力などどこにも無い」

「それは我等も同じ、そう理解しています。けれど幕藩体制は終わるから、藩の縛りは関係なくなる」

という陸奥の言葉を受けて、宗興がこう続ける。

「坂本殿は奇跡的な立場に居られるのです。幕府海軍に通じ、その一方では長州藩にも顔が利く。そしてそもそもが土佐藩。浪人とは言え、実に都合のよい立場に居られる」

「どういう事よ」

「坂本様の発言がそれぞれに影響を与える事が出来る立場だという事です。だから宗光を帯同させている」

「・・・土佐を捨て脱藩したわしがのう」

「変革の真ん中にいるのです」

竜馬は感覚的に納得した。

「何やよう分からんが、まあ、えいぜよ。・・・これでえいろう？ 陸奥よ」

「はい、坂本さん」

竜馬は宗光をジッと見詰めている。

「私がお話しした内容をきっと理解頂けると信じております」

と兄の宗興は期待感を滲ませていた。

・・・竜馬は歴史の裏側に潜む勢力がある事。そして自分がその勢力と関わっている事を認識し、それから逃れられないであろう事を痛感していた。

だが、心の片隅でワクワクするような期待感も騒いでいる。

「もうえいろう、行こうや」

頭を下げる竜馬。

そして陸奥宗光を伴って粟田口を後にした。

道すがら竜馬は陸奥に尋ねた。

「この話、知っちゅうのは誰よ」

「大勢三転考ですか」

「そうよ、徳川家が終わるといふ予言よ。下手に伝われば大事になる」

竜馬のその目は人を選別するように厳しい。

「誰と誰よ、知っちゅうのは！」

躊躇いを見せる陸奥に対し、竜馬の瞳がそれを許さなかった。

「長州の吉田松陰殿には以前からお伝えしていたようです」

「松陰先生か、それであんなにも強引に・・・」

腑に落ちた。

「ならば桂さんも知っちゅうのか」

「ええ、お伝えしました」

「久坂もか？」

「どこまで理解されたかは不明ですが・・・」

何か大きな課題の答えの入った風呂敷がハラハラとほどけていくような錯覚を竜馬は覚えた。

「ほんじゃ、薩摩もか」

「西南雄藩の主要な方々には何らかの形で伝わっているはずですよ、特に久光公には」

「容堂公もか！」

陸奥は頷いた。

「あの御方はかなりお詳しい。三条家にも繋がっておられ、春嶽公とも意思の疎通がありますから」

「春嶽公もか。・・・ならば慶喜公も」

「恐らくは」

「・・・将軍は？」

「将軍様にはまだ伝えられてはいないと思われます」

「・・・分かった」

竜馬は立ち止まり、腕を組んで天を仰ぐ。

思考しているのだろう。

「・・・坂本さん」

「おまんの素性も分かった」

「・・・坂本さん。私はこれからも・・・」

「わしらにとって、おまんは大切な仲間よ。これからもずっと仲間ぞ」

少し笑顔でそう言った。

「私は、坂本さんにどこまでもついて行きますよ、それが使命ですから」

陸奥宗光はますます坂本竜馬という人間に惹き込まれていくのを感じていた。

瞬きもせず、竜馬は陸奥の目を見詰めていた。

公武合体となった京では、公武が合議して国政方針を決めていく事になっていた。

武家側からは一橋慶喜、そして朝廷参預に任命された賢侯達に島津久光と松平容保を加えた面々が二条城で会合を開き、その後、二日おきに天皇の前で開かれる朝議に参預らが出向いて参加していた。

しかしその参預会議に暗雲が立ち込め始めていたのである。

公武双方の意識の違いが明確に現れてきた。

賢侯達は、諸外国と通商条約を結んだ限り、まず開国を進めるべきだと考えていたが、中川宮は一向に攘夷を譲ろうとしないのだ。それは天皇の意志でもあるから厄介だった。

そんな状況を案じたのが参預の立場から外れている島津久光である。・・・彼は参預の立場に就く事を拒み俯瞰する立場にいた。

「武家側は、万一にも異国との全面的攘夷戦争になれば日本に勝ち目はない事を理解しているからこそ、中川宮と手を組み、狂信的に攘夷を唱える長州藩を京から退けたではないか。しかし公家側はまだ攘夷の無謀さを理解していないのか。・・・このまま行けば公武が対立し、公武合体は暗礁に乗り上げてしまうだろう」

久光はそれを恐れた。

「そして公武間の対立は日本を分断し、・・・それに乗じて西洋人は日本侵略に乗り出してくるに違いない。何としてもそれだけは防がなければならないのだ！」

一計を案じた。

・・・中川宮の考えを改めさせる事が、天皇のお考えを改めさせる事になる。・・・中川宮と対等な立場で対抗できる人物は居らぬものか・・・。

家臣には以前から探らせている。

そしてある報告を受けていた。行き当たった人物は・・・中川宮の兄・勸修寺宮濟範（さいはん）親王であった。

「濟範親王は世の情勢をよく知り、国内情勢や海外事情にも通じております。開国にも賛同的な考えを持っておられます」

中々の英明な人物である。

彼を朝議に加えるため、久光は動き始めた。

勸修寺宮濟範親王は実際に中川宮の兄である。

中川宮と同じく伏見宮家に生まれた長子であったが、訳あって祖父の子とされ、幼くして門跡寺院の勸修寺を相続する事を決められていたのであった。やがて出家して濟範入道親王となったが、二十六歳の時に二歳年下の叔母と共に出奔するという不祥事を起こして伏見宮より除籍されてしまったのだった。

その後は東寺での蟄居に処せられ、安政期に山科勸修寺への帰住を許されてからは勸修寺慈尊院にて謹慎しつつ、国内情勢や海外事情への見識を深めていたのである。そんな濟範親王の噂を聞き付けて志士が接近するようになり、薩摩藩士も接触するようになっていたのだ。

薩摩藩士に持論たる時務策を披露し、その報告を受けた島津久光が濟範親王の開明的な才覚に目をつけたのである。

「中川宮を抑え込むためにも濟範親王を朝議に加えるべきだ」

島津久光は二条城で開かれた武家側の会合の場でそう主張し、賢侯達もそれに賛同した。

そして文久四年（1864年）一月、武家側の総意として濟範入道親王の還俗を孝明天皇に願い出ると、公武合体の立場から武家の要望を受け入れて、濟範入道親王の伏見宮への復帰を許したのである。

濟範親王は孝明天皇の勅許をもって復飾し、親王宣下され、山階宮（やましなのみや）の宮号を賜り、名を山階宮晃（あきら）親王と改称した。更には国事御用掛を拝命し、朝議に加わる事になったのである。

中川宮と一橋慶喜が協力体制を固めていた朝廷にあって、それに対抗すべく島津久光ら賢侯は山階宮を送り込む事に成功したのであった。

幕府側の一橋慶喜と手を結び攘夷を探る中川宮。

開国を望む島津久光らと繋がる濟範親王こと山階宮。

徹底攘夷と倒幕を目指す長州と結び付く有栖川宮。

中川宮、山階宮、有栖川宮。

三者は分列した日本のそれぞれの象徴として朝議に当たるのである。

しかし当然朝議はまとまらず、混迷していくのであった。

幕末の世の乱れは異国との接触が発端である。

だがそれが尊王攘夷となって激しく燃え上がったのは、同時に巨大な国内問題が内在していたからである。

その元凶とも言うべき問題、・・・それが浪人問題であった。

浪人達は尊王を頼りとして京に集まった。

藩や幕府への満を抱えていた。

藩を追われ、禄を失い、その挙げ句に家族までも失った者達である。希望を失い、人生に行き詰まり、絶望の中で、彼等は世の中がひっくり返る事をまるで恐れず、それどころか戦国の世となって、新たな日本の守護者の下での立身出世を思い描いていたのである。

彼等は長州藩が反幕府に立ち上がる事に肩入れした。そしてその扇動に乗り、京の町を乱したのである。

それに手を焼いた幕府は反乱分子の排除に乗り出して会津藩に京都守護職を命じ、反幕府運動を唱える浪人達を斬り捨てるために壬生の浪人集団・新撰組を起用したのだ。

そんな京の現状である。

危機を抱いたのが坂本竜馬である。

「浪人を全て斬り捨てても根本的な問題解決にはならん！ 政変によって京から長州藩が消えて、残された浪人達は単なる無頼の徒になってしもうた。彼等を救う手立てを考えんとイカン。京の乱れは日本国の乱れに繋がるぜよ！」

そう主張して幾度も勝海舟や元外国奉行大久保忠寛（ただひろ）と意見を交換させてきていたのだ。

そして独自に仲間を使い、ある調査を進めてきたのだ。

・・・それが浪人達を蝦夷地に送り込む計画である。浪人達には蝦夷地を開拓させて土地を与え、同時にロシアからの北方侵略を防ぐ防波堤とする、一挙両得の計画なのだ。

孝明天皇は公武合体による日本政体の安定を望んでいる。だから異国から日本の国体を護るために、朝幕の一致体制を選択したのである。尊王攘夷に扇動される浪人達を危険視すると共に、浪人達を煽り立てた長州藩の軽率な攘夷行動を非難し、運動の中心たる三条実美ら七卿と長州藩に対して懲罰を下すよう命を下していた。

長州藩の桂小五郎は解っていた。

「孝明天皇は我等長州を危険視している。その過激な攘夷行動を毛嫌いしているのだ」
ため息が出た。

「命を懸けて攘夷行動を起こしたのに」

馬関海峡を封鎖して通過しようとする異国船を攻撃したのも天皇の意志に沿ったものである。
だが異国の報復攻撃を受けて壊滅的な痛手を負ってしまった。

「それでも我が長州藩は海峡の封鎖を諦めてはいない。西洋列強の報復を警戒しながらも海峡封鎖を継続しているのだ。そして再び京の実権を奪回せんと睨み続けてもいるのだ」

長州藩にすれば強烈な尊王精神を持ち続けてきた歴史がある。天皇の攘夷願望を後押しするために海峡封鎖し異国との戦いを続けているという自負がある。

「それが我が長州藩士の行動の基なのだ！ けれど・・・長州は苦しんでいる」

天皇の心変わりを理解できないからである。

衝撃だった。

・・・肝心の天皇が攘夷の申し子たる長州を批難し、先導する三条実美ら七卿に対する懲罰をも口にするとはいとも思えなかった事だった。

「我らは天皇の心に従い、命懸けで異国と戦ってきたのに・・・何故だ！」

朝廷が公武合体派へと移り、長州は朝敵になってしまったのだ。そればかりか幕府からも敵視されている。

余りにも苦しい状況である。

しかし、

「それでも彼等は攘夷行動を止めようとは思わない。徹底攘夷！ 日本国体を護るのだ！」

それが吉田松陰の教えであり、それを受け継ぐ吉田松陰門下生の行動規範なのだ。

そして異国に尻尾を振る徳川幕府を激しく憎んだ。

「無能な誠意大將軍、徳川家は倒してしまえ！ 世の中を一新するのだ、倒幕だ！ 会津、薩摩は永遠に許さない！」

彼等はそう誓っていた。

「京から追い落とされた恨みは絶対に忘れない！ 長州は傷付いている。・・・いよいよとなれば、玉を代えてでも・・・」

そう悟っている。

玉とは天皇の事なのであった。

長州は歯を食い縛って立ち上がろうとしていた。馬関の海上封鎖を継続し、京の奪回をも目論んで新たな活動を展開していたのである。

まず対幕府を視野に入れて、その拠点をも日本海側の萩から瀬戸内側の防府・三田尻に移した。そして長州の攘夷思想に賛同する諸藩からの脱藩浪士や志士達をドンドン受け入れていく。

「まだまだやれるぞ！」

異国の圧倒的な攻撃力によって大砲も台座も失い、家や町を焼かれたが、長州人の心は折れていなかった。

馬関海峡の封鎖を継続させている浪士の中に、土佐の脱藩浪士も加わっていた。・・・中岡慎太郎である。

「もう土佐の勤王は潰された」

彼は土佐者に近況を伝えていた。

「土佐勤王党の瓦解が山内容堂によって行われ、土佐を捨てて来た。もう長州に期待するしかない」

長州に馳せ参じるしか道はなかったと彼は言った。

「武市瑞山も捕えられたのか？」

「その命すら危ういだろう」

衝撃的だった。その実力を武市瑞山に認められていた中岡である。彼が土佐の勤王化を諦めたのだ、土佐の藩論はもう勤王には戻せないと。

しかし今の長州にとって、中岡慎太郎という実力者は歓迎だった。

「・・・長州の復権が必要です」

とキッパリ口にする。

「まず私が薩摩藩の動向を探ってきます」

「薩摩は憎むべき相手だ！ 政変の恨みがある！」

と長州藩士は反発するが、

「西郷隆盛に接触してみましょう。彼は島津久光とは違って、もっと大きな事が出来る人物だと聞き及んでいますから」

八方塞がりに追い込まれていた長州藩にとって、果たして光明となるのであろうか。

中岡は動き始めた。

その一方で、ある風評が流され始めていた。

『国内の物価が高騰している原因は薩摩藩だ。薩摩藩が異国と交易しているのが原因なのだ』奇兵隊の下部組織に当たる諸隊によるものだった。

彼等は暴走を始めていた。

異国の商人が日本にやって来ていた。

長崎ばかりか横浜にも居留するようになり、兵庫の開港までも求めてきている。

彼等がやって来たのは交易のためであり、それが増大する事で国内は品薄状態に陥る。物価高が庶民の生活を襲って来ていた。

それでも交易で日本が潤えば問題はないが、幕府側に落ち度があった。交易に用いる小判と外国硬貨の交換比率が異国有利であったために日本から小判が持ち出され、国益を損なっていたのである。日本は疲弊するばかりだった。

金の含有量の多い小判がどんどん海外に持ち出されてしまったのは、幕府の無能さが招いた悲劇である。交易の旨味を知る異国人に巧く利用されて、日本国内には品薄と物価高だけが残り、庶民を襲った。

人々は幕府を非難すると共に、交易に奔走する日本人の商人を軽蔑するようになっていた。

この時、アメリカでは南北戦争が起こり、南部からの綿花輸出が途絶えていた。世界中で綿花不足が起こっていたのである。

しかし日本には良質な綿花が豊富にあった。

それに目をつけた西洋人は、日本製の綿花を挙って求めてきていた。いち早くそれに気づき、輸出を増大させていたのが薩摩藩だった。

「・・・イギリス人は綿を好みます。それも日本の綿は大変良質なのです」

イギリスと急接近している薩摩藩はその情報を得ていたのだ。そして独自の交易窓口を開いて国内の綿花を海外に流し、密かに利益を上げていたのである。

本来、幕府は長崎でオランダなどの限られた国との交易を認めていたが、それは全て幕府が牛耳っていた。つまり交易の利益は幕府が独占していたのだが、幕府の力が弱まってきたところで薩摩藩は独自の交易を開始したのである。

それが原因の一端であったのか、確かに国内物価が上昇して人々の生活を苦しめている。

長州藩過激派は憎い薩摩藩を標的した。

「薩摩藩は表向きで攘夷を口にしておきながら、その裏で異国と通商貿易を行い、巨大な利益を得ている。許さんぞ！」

諸隊の若者達は怒りが燃え上がり、薩摩商人の御用船を襲撃するのである。長崎丸事件を起こしてから僅かひと月後、一月十二日の事であった。

その日、薩摩の御用船・加徳丸は長州藩内に寄港していた。

実行犯はその積み荷に火をつけ、積み荷だけでなく船までも燃やして、遂には沈没させてしまったのである。そればかりか船長をも殺害し、その生首を大坂の南御堂に晒したのである。

それだけではない。

・・・同時にある事が起こっていた。

晒された船長の首の横で犯人と目される二人の元長州藩士が互いに相手を刺す形で自決していたのである。

それを見て大坂の人々はこう理解した。

「・・・この二人の長州人が犯人なのだ。薩摩の悪行を明らかにしようという心意気が行き過ぎたもので、犯人はその責任を取って自決したのだろう。何とも潔いではないか」

人々は二人の長州人に感動すら覚えたのであった。

・・・しかし、どこか引っ掛かるところがある。

坂本竜馬はそう感じていた。

「大坂の界限では事件を知らん者はない。南御堂に置かれた生首、それは薩摩御用船の船長で、その犯人と目される二人の長州人が互いに差し替えて死んじゃった」

それが様々な憶測となって四方に拡がり、竜馬の耳にも届いたのである。

・・・互いを刺す形で死んでいたとは・・・。

「妙じゃな」

心の片隅で違和感が生まれていた。

「・・・加徳丸は長州の者が所有する船よ。その船を薩摩が雇い、長州藩内に寄港した際に襲われちゅう・・・。なのに犯人らしき長州人二人は刺し違えちゅうとは、どこか不自然よ」

竜馬はその裏を探った。

京を追われて長崎丸事件を起こした長州藩である。不穏さと暴走する危機を覚った坂本竜馬は常に探りを入れていた。

竜馬の目は別の角度から真相を見抜いていく。そしてこの事件には複雑な背景がある事を掴んだのだ。

一つ一つ薄皮を剥ぐように事実があきらかになっていった。

まず実行犯は二人の長州藩義勇隊士、水井精一と山本誠一郎の二名。彼等は藩に迷惑をかけぬよう脱藩して浪人の身となり、その上で凶行に及んだらしい。そして船長の首を晒した後に二人は割腹し、互いを刺すように折り重なって死んだのだった。

状況はそう推測させている。

さらに調べを進めると、二人の亡骸の傍らには斬奸状があった事が明かになった。

そこには、

『我等は長州藩を脱藩した単なる浪人である。異国と交易する不届きな商人を改心させるために天誅を下した。我等はここで割腹する』

と綴られていたのだ。

表向きで攘夷を標榜していた薩摩藩の御用商人は綿花や菜油を異国に横流し続けており、国内相場が釣り上がる原因となっている。

・・・幕府に尻尾を振りつつ、長州を京から追い落とした薩摩藩である。長州藩士からすればその御用商人までもが憎いだろう。

「許せなかったのだろう」

そう思える。

だから長州に寄港した薩摩御用船を焼き、船長を殺害したのだ。そう思うのが当然の事件である。

しかし、違和感が竜馬を不機嫌にさせている。

(本当にそれが事件の真相か?)

・・・府に落ちない。長州の過激行動やないのか? 長崎丸事件に続く長州藩士の暴挙を美談にすり替えようとする偽装やないのか?)

嫌な予感が漂ってる。

・・・人々は異国人が侵略者だと認識していた。それが歴史の事実なのである。

だから世間は攘夷を叫んで異国と戦う長州藩を支持していた。

世の攘夷論者も元長州藩士の行動を讃えており、公武合体を進める幕府や薩摩藩を非難していたのである。

「薩摩は密貿易によって綿花や菜油を異国に売り渡して私欲を肥やしている。奴等が日本民衆の暮らしを苦しめているのだ！ それを暴露した長州人は英雄だ。その上、その責任を取って自ら切腹するとは武士の鏡。京を追われても長州は天下のために戦っているのだ。長州人は何と献身的であろうか」

人々は薩摩の密貿易を暴いた上で命を断った元長州藩士を誉め称えた。

・・・異国の手下となった薩摩。

・・・異国と戦う長州。

その図式がこの事件で明確になったのである。

— 神戸・海軍塾 —

「・・・京を追われ、地に落ちた長州藩の評判を上げるため、・・・世間の同情を得るために利用した事件よ」

そう言って竜馬は海軍塾生達から視線を外した。

竜馬から事実を聞かせた海軍塾生の中には、長州の攘夷運動に賛同する者が多い。そもそもが尊王攘夷に燃えて藩を飛び出した者達ばかりなのだ。

それぞれにこう口にした。

「薩摩が異国と交易を行っているのは事実だ」

「その旨の斬奸状を示したからこそ、世間に薩摩の罪状を明らかに出来たのだ。長州を京から追い落とした憎き薩摩の悪行を暴くためならば、やむを得ん」

聞いていた竜馬はそんな盲目的な尊王攘夷を否定しなかった。・・・竜馬自身にも心の根底に尊王攘夷の炎がある。だから頭ごなしに否定しても良い結果にはならないだろうとそれを思いとどまったのだ。

けれど海軍塾は長州の策謀に荷担できる立場ではない。

今は海軍操練所の設立が第一なのだ。

「事件は仕組まれたものよ」

「えっ、どういう事ですか」

塾生達は一斉に竜馬を見た。

竜馬は豪語した。

「薩摩は密貿易の一端に長州藩の加徳丸を利用した。それを長州が叩いて見せた。その責任を取る形で二人の長州人が潔く刺し違えて死んだ。・・・全ては吉田松陰門下生の計算による策略ぜよ！」

やがて事件は奇妙な方向に展開し始める。

船長殺害の実行者とされた義勇隊の水井精一と山本誠一郎は実行者ではなかったという事実を、竜馬が突き止めたからである。

八・一八の政変で京から追放された長州は、会津と薩摩を心底から憎んでいる。中でも吉田松陰門下生はその報復を狙っていた。

・・・手段は選ばない。

そこで長州藩の義勇隊総督に圧力を掛けて、加徳丸襲撃に参加していなかった水井と山本の隊士二人に次のように命じさせたのだ。

「加徳丸船長の首を大坂に晒して来い！」

地に落ちた長州藩の評判を上げるため、世間の同情を得るために二人を利用しようとしたのである。そして水井と山本は強要されて死んでいったのだ。では・・・本当の実行犯は誰なのか・・・。

真の実行犯は・・・久坂玄瑞ら奇兵隊だった。切腹は、久坂玄瑞らに強要されたものであったという事実を竜馬は掴んでいた。

「義勇隊の水井と山本は船長殺害犯やない。二人の若者は加徳丸焼き討ち事件に利用されて死んだだけじゃ！」

そう見抜いたのである。

吉田松陰門下生による策略だった。

船を焼き、船長を殺しても、薩摩が異国と交易を行っているという事実を示せば、世間は薩摩を非難するようになる。

「人々の前に首と斬奸状を晒せば、薩摩の悪名を広げ、長州の評判を上げる事になる」奇兵隊は若い水井と山本の二人を犯人に仕立てて死んでもらう事にしたのだ。

「公のために私を捨てよ！」

吉田松陰の教育はとても厳しいものだった。

行動は全てその規範に基づいており、日本の国体を脅かす者や穢す者、そして国益に反する者を徹底的に攻撃する。

「手段は選ばない。暗殺であっても構わない」

暗殺実行に反対する者も敵視する。

その過激さが久坂玄瑞に引き継がれているのだ。師であり、義兄である吉田松陰の死を背負い、代わって使命を全うしようとしている久坂玄瑞に。

・・・まさに吉田松陰の狂気を受け継いでいたのである。

事実はこちらだ。

加徳丸を襲い、船を焼き、船長の首を刎ねたのは奇兵隊である。

そしてその首を義勇隊の水井と山本の二人に大坂にまで持って行かせたが、大坂にまで首を持ってきた水井と山本の二人は不審に思い、長州藩大坂藩邸の重臣に奇兵隊の梟首計画を報告したのだ。

すると藩邸は、

「下手をすれば我が藩の悪評に繋がり、評判を落とすだけだ」

と梟首計画の中止を彼等に命じた。

だが二人は困った。・・・義勇隊総督の命に背く事になるではないか。

板挟みになった二人のところへ京から駆け付けたのが、久坂玄瑞ら吉田松陰門下生である。

久坂らは長州藩の復権を目論んで京に潜伏していたが、梟首計画が実行されていないと聞き付けて大坂に駆け付けたのだった。

「直ちに梟首を実行せよ！」

と水井と山本を責めるが、二人はその命令を受け入れずに長州へと戻ってしまった。

久坂らは長州にまで二人を追い掛け、義勇隊総管の命令により抵抗する二人を再び大坂へと連行した。

大坂南御堂に連れて来ると、そこに加徳丸船長の首を晒し、

「斬奸状の前で自決せよ！」

と水井と山本に互いを刺して自決するよう強要したのである。

久坂は非情だった。

・・・久坂玄瑞は吉田松陰の狂気を受け継いでいる男なのだ。手段は選ばない。

水井と山本は吉田松陰門下生に取り囲まれていた。久坂玄瑞、品川弥次郎、野村和作、時山直八、杉山松介、そして義勇隊総管の佐々木亀之進。みな松下村塾生であった。

そんな異常な状況下で水井精一と山本誠一郎はその命を絶った・・・。

・・・久坂らが、忠義の長州藩士を演じる道具として水井と山本を利用したのである。

坂本竜馬はそれを久坂玄瑞本人から聞き出していた。

事件後、久坂らの思惑通りに世間は反応した。

「薩摩め！」

「品薄、高騰、それらは全て薩摩の悪行だったのか！」

薩摩藩による異国との交易が明るみになった事で、民衆はその怒りを薩摩に向けたのである。

「島津久光を許すな！」

・・・薩摩藩に非難が集中し、久坂ら吉田松陰門下生はほくそ笑んだ。

一方、薩摩は薩摩の考えで動いていた。

徳川幕府に取って代わるだけの力を持つ薩摩藩である。だがイギリスとの戦争以降は公武合体、そして島津斉彬が推し進めていた開国へと舵を切ったのである。

・・・挙国一致、公武合体による開国である。

「世を一新して、新体制での主導権を握るのだ！」

そのためにも藩の経済力や戦力が必要であり、イギリスと手を組む必要があった。

それを目指して京の政変を起こして長州藩を追いやったのだ。

島津久光は賢侯を京に集結させて、徳川幕府に代わる挙国一致政体として参預会議を成立させた。参預会議は一橋慶喜（将軍後見職）、松平春嶽（越前福井藩）、山内容堂（土佐藩）、伊達宗城（宇和島藩）、松平容保（会津藩）の面々で構成され、公武合体を主体とした開国指向である。島津久光はその面々には加わらず、長州との摩擦を避け、外から操る立場を取ったのだ。

だがそれが長州藩の久坂玄瑞らには我慢ならなかった。

「薩摩は天敵だ！」

そこで加徳丸事件を起こして、薩摩藩の失墜を狙ったのである。

そして確かに薩摩への非難が集中した。

久光の立場が苦しくなる。

・・・やがて扇の要を失った参預会議は空中分解へと向かうのである。

— 京 —

文久四年（1864年）一月二十一日、上洛した将軍・徳川家茂が参内した。

公武合体が一層強固なものとして認識され、孝明天皇の信任を受けると共に、孝明天皇から勅書を賜ったのである。

勅書には、無謀な攘夷を望まない旨が綴られていた。また半年前まで頼りとしていた長州藩を『暴臣』と呼ぶようになり、三条実美ら尊王攘夷派の理屈を『匹夫の暴説』とまでこきおろしている。彼等を罰せよとまで口にされたとも聞いている。

・・・無謀な攘夷を望まない。

それが天皇の意思である。

（公武合体、そして島津久光主導の参豫会議によって天皇の不安が払拭され、攘夷の意志が薄らいでいるのだろう）

将軍家茂は安堵した。

しかし、

（・・・幕府の進める鎖港交渉を望んでいないのだろうか。ヨーロッパへと送り込んだ鎖港談判使節団も望んでいない事なのだろうか）

その心変わりが恐ろしくもあった。

ともあれ、今は薩摩主導の参豫会議が機能して公武間の関係も良好にある。

・・・薩摩主導。

そこに家茂は不快なものを感じた。共に入京した老中達も不快さを顕にしているようだ。

「やはり薩摩が操っているのです。参豫会議も朝廷も、そして天皇の御意志にまでも影響を与えている」

徳川幕府にすればそれが一番面白くない。

（・・・長州主導で攘夷を迫られて鎖港交渉まで進めてきたにも拘わらず、今度は薩摩主導で公武合体とは・・・）

常に主導権は雄藩にある。

全く正反対の方針転換に徳川家が振り回されているのだ。。

「島津久光は徳川幕府を凌ぐ存在にまで登り詰めていくつもりなのでしょう」

幕府の将軍後見職や元政事総裁職までも取り込んでいるのだから、老中がそうまで言うのも無理はない。

けれど徳川家にすれば怒りが収まらない。

・・・島津め！

そして老中達はその怒りを将軍後見職の一橋慶喜にぶつけた。

「あなたは徳川家よりも島津家に付くつもりなのか！ 御三家の水戸徳川家出身であり、御三卿の一橋家として恥ずかしくないのか！」

・・・梅の蕾が膨らんで来ている。もうすぐ春になれば、その花を咲かすだろう。

勝海舟の念願の神戸操練所の完成は近い。

「あと数ヵ月だ」

勝海舟はもう神戸に入り浸りである。

ここが完成したあかつきには、諸藩からの練習生を積極的に受け入れるつもりなのだ。江戸の築地操練所は幕臣でないと入門できないが、ここ神戸は幕臣でなく諸藩士であっても有能な人材であればドンドンかき集める事が出来る。

彼には壮大な計画がある。

・・・アジア三国海軍構想。日本、朝鮮、清国による海軍構想である。

それは日本を中心として、隣国の朝鮮や中国と同盟関係を結び、西洋人の侵略という魔の手からアジアを護る壮大な計画なのだ。

「・・・日本の平和と安定には、アジアを視野に入れた構想が必要だと考えてここまで来た。そのための神戸操練所であり、緒藩からの人材受け入れであると重々承知している。つまり神戸海軍操練所は、日本やアジアを西洋文明による侵略から救う大構想の第一歩なんだ」

しかし、

「勝海舟は幕臣でありながらも反幕府勢力を育てようとしている」

と陰口を叩く幕閣もいる。

それでも春嶽から將軍までも説き伏せてこの神戸操練所計画をやっところまで漕ぎ着けた。

坂本竜馬が中心になって仲間を集めてくれている。けれど一つ見方を変えれば反幕府のための養成所とも見えなくもない。

それが懸念材料だった。

事実、今のところは幕府が敵視する尊王攘夷の脱藩浪人や元志士ばかりが集まっている。

「無事に船出してくれねえとな、神戸海軍操練所がよ・・・」

しかしその懸念が今後、勝海舟を苦しめるのである。

そんな新年早々の一月二十四日、日本を離れていたオールコックが横浜に戻ってきた。

イギリス本国で一体どんな方策を授けられたのであろうか。

・・・日本侵略の次の一手は何なのであろうか。

そして坂本竜馬は勝海舟と共に長崎へと向かう事になるのである。

<次章> 竜馬と長崎の章に続く

竜馬外伝 i 43 陸奥宗光の秘密の章

<http://p.booklog.jp/book/111412>

著者：中祭邦乙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nakamatsuri/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111412>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト